

巖谷大四

名作こぼればなし

241182



日文 701487709

こぼればなし



巖谷大四

文化出版局

著者略歴

巖谷大四（いわや だいし）

一九一五年東京に生まれる。一九四〇年早大英文科卒業。文芸家協会、日本文学報国会書記を経て、戦後鎌倉文庫出版部長、河出書房「文芸」編集長、書評紙「週刊読書人」編集長など歴任。一九六五年以来文筆生活に入る。日本文芸家協会副理事長。著書に『随筆・父と子』（三月書房）、『文壇紳士録』（文藝春秋）、『文学歳時記』（TBSフリクニカ）『井上靖』（保育社）、『波の遺音』（新潮選書）ほか多数。

名作こぼればなし

定価一、三〇〇円

昭和五十七年八月二日

第一刷発行

著者 巖谷 大四

発行者 大沼 淳

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二の一

郵便番号 一五一

電話 (〇三) 三七〇一三二一 (代表)

振替 東京二一九五六七〇番

印刷所 カバー・表紙 文化カラー印刷

本文 凸版印刷

製本所 和田製本

名作こぼればなし 目次

- 『突貫紀行』——幸田露伴——八
『浮雲』——二葉亭四迷——一〇
『武藏野』——山田美妙——一三
『藪の鶯』——三宅花圃——一五
『小説神髓』——坪内逍遙——一八
『こがね丸』——巖谷小波——二〇
『小公子』——若松賤子——二三
『たけくらべ』——樋口一葉——二五
『金色夜叉』——尾崎紅葉——二七
『不如帰』——徳富蘆花——三〇
『病牀六尺』——正岡子規——三三
『雨』——広津柳浪——三四
『東洋の理想』——岡倉天心——三七
『火の柱』——木下尚江——三九
『春の鳥』——国木田独步——四三
『吾輩は猫である』——夏目漱石——四四
『野菊の墓』——伊藤左千夫——四七

- 『蒲団』——田山花袋——五〇
『食後の唄』——木下左太郎——五三
『春』——島崎藤村——五五
『一握の砂』——石川啄木——五七
『歌行燈』——泉鏡花——六〇
『暗夜行路』——志賀直哉——六三
『興津彌五右衛門の遺書』——森鷗外——六五
『哀しき父』——葛西善蔵——六六
『大菩薩峠』——中里介山——七〇
『柿二つ』——高浜虚子——七二
『銀の匙』——中勘助——七五
『二月』——網野菊——七七
『月に吠える』——萩原朔太郎——八〇
『船頭小唄』——野口雨情——八三
『栗鼠、栗鼠、小栗鼠』——北原白秋——八六
『憑き物』——岩野泡鳴——八八
『蔵の中』——宇野浩二——九一

- 『正太の馬』——坪田讓治——一九三
- 『或る女』——有島武郎——一九五
- 『入れ札』——菊池寛——一九六
- 『憑かれたひと』——室生犀星——一九〇〇
- 『無限抱擁』——瀧井孝作——一九〇三
- 『月下の一群』——堀口大学——一九〇五
- 『無題』——川崎長太郎——一九〇八
- 『大阪の宿』——水上瀧太郎——一九一〇
- 『或る旧友へ送る手記』——芥川龍之介——一九二二
- 『冬の蠅』——梶井基次郎——一九二五
- 『一九二八年三月十五日』——小林多喜二——一九二七
- 『キャラメル工場から』——佐多稲子——一九三〇
- 『上海』——横光利一——一九三三
- 『象徴の烏賊』——生田春月——一九三四
- 『聖家族』——堀辰雄——一九三七
- 『風琴と魚の町』——林芙美子——一九三九
- 『鮎』——丹羽文雄——一九三三

- 『行乞記』——種田山頭火——一九三四
- 『人生劇場・青春篇』——尾崎士郎——一九三七
- 『暢気眼鏡』——尾崎一雄——一九四〇
- 『第七官界彷徨』——尾崎翠——一九四三
- 『青春物語』——谷崎潤一郎——一九四五
- 『鶴八鶴次郎』——川口松太郎——一九四七
- 『雪国』——川端康成——一九五〇
- 『裸蟲抄』——牧野信一——一九五三
- 『道化の華』——太宰治——一九五五
- 『鶴は病みき』——岡本かの子——一九五七
- 『藍色の暮』——大手拓次——一九五九
- 『遣唐船』——高木卓——一九六一
- 『神楽坂』——矢田津世子——一九六四
- 『溼東綺譚』——永井荷風——一九六七
- 『智恵子抄』——高村光太郎——一九六九
- 『糞尿譚』——火野葦平——一九七三
- 『乗合馬車』——中里恒子——一九七四

- 『暖流』——岸田国土——二七七
- 『生きてゐる兵隊』——石川達三——二七九
- 『怪我の功名』——里村欣三——二八三
- 『夫婦善哉』——織田作之助——二八四
- 『縮図』——徳田秋声——二八六
- 『わが心の遍歴』——長与善郎——二八九
- 『赤蛙』——島木健作——二九一
- 『かういふ女』——平林たい子——二九三
- 『第二芸術——現代俳句について』——桑原武夫——二九六
- 『戦災者の悲しみ』——正宗白鳥——二九八
- 『夏の花』——原 民喜——三〇一
- 『播州平野』——宮本百合子——三〇四
- 『帰郷』——大佛次郎——三〇五
- 『本の話』——由起しげ子——三〇八
- 『特別阿房列車』——内田百閒——三二〇
- 『武蔵野夫人』——大岡昇平——三二三
- 『安宅家の人々』——吉屋信子——三二五
- 『海上の道』——柳田国男——三二七
- 『二十四の瞳』——壺井 栄——三二九
- 『喪神』——五味康祐——三三三
- 『村のエトランジェ』——小沼 丹——三三四
- 『驟雨』——吉行淳之介——三三六
- 『高安犬物語』——戸川幸夫——三三九
- 『白い人』——達藤周作——三三一
- 『若い詩人の肖像』——伊藤 整——三三三
- 『耳学問』——木山捷平——三三五
- 『楡山節考』——深沢七郎——三三八
- 『お吟さま』——今 東光——三四〇
- 『氷壁』——井上 靖——三四三
- 『詩人 金子光晴自伝』——金子光晴——三四四
- 『死者の奢り』——大江健三郎——三四七
- 『四万人の目撃者』——有馬頼義——三四九
- 『総会屋錦城』——城山三郎——三五一
- 『寒村自伝』——荒畑寒村——三五四

『巷談本牧亭』——安藤鶴夫——二五六

『激流』——高見順——二五九

『芝居むかしばなし』——福原麟太郎——二六一

『白い罌粟』——立原正秋——二六三

『黒い雨』——井伏鱒二——二六六

『桜守』——水上勉——二六八

『豊饒の海』——三島由紀夫——二七〇

『恍惚の人』——有吉佐和子——二七三

『薄墨の桜』——宇野千代——二七五

『北の河』——高井有一——二七七

装幀 巖谷純介

名作こぼればなし

『突貫紀行』

幸田露伴

北海道での逆境から……………



明治十八年の春、まだ雪に埋もれた小樽の港に、赤毛布にくるまった出かせぎ漁師や移住民を満載した船が入港した。そこから徒歩で余市に向かう一群の中に、ギッシリと本を詰め込んだ重い行李を持ち、都落ちの悲哀をかこちながら足をひきずる十九歳の青年がいた。幸田露伴の若き日の姿である。

露伴が北海道まで渡って来たのは、家が貧しく、自活の道を求めて官費の電信修技校に入学したためである。彼は卒業した時の成績が二十人中十六番という、あまりかんばしくない成績で、実修見習いのほうもあまりよくなかったので、酷寒の未開の地、北海道に配属されたのである。

そのころ余市はニシンの千石場所として活況を呈していた。文化の尖端をゆく電信局がいち早くこの地の郵便局に併設されたのもそのためであった。局長以下五人で、露伴は通信省判任官十

等技手（月給十二円）の資格でやって来て、「ツー・トン・ツー」を打っていたのである。浜中町の局から二丁ほど離れた沢町の荒物雑貨商の二階に下宿し、そこから薩摩絣に白の兵児帯、高下駄といういでたちで、しかも木刀を差して出勤したという。

学問の好きな、都会生まれの露伴にとって、北辺のこの地での、キーを叩く青春は、何とも味けないものだった。そのうちに、永全寺という寺の住職で、奇行に富む沢辺東開というインテリ和尚と知り合い、蔵書を読ませてもらい、酒と女の手ほどきをうけた。

そのころこのあたりに料理兼業の遊廓が十二軒ほどあった。露伴は時折、酒の力をかりて、「辻村楼」という家上がり、青春のうさをはらした。花蝶という女がいて、露伴の気に入った。だんだん足しげく通うようになった。日中は、手持ちぶさたの廓の女たちに蚕の飼いを教えた。りした。

また同僚にさそわれて、岩内あたりまで足をのばし、金山の採掘にまきこまれそうになり、天然氷をストックして夏場にひと儲けしようとして見事に失敗したりした。

だがそんな生活が何ともやりきれず、明治二十年八月、露伴はどうとう職をなげうって余市を出奔した。

身には疾あり、胸には愁あり、悪因縁は逐へども去らず、未来に楽しき到着点の認めらる

るなく、目前に痛き刺戟物あり、欲あれど、銭なく、望みあれども縁遠し、よし突貫して此
逆境を出でんと決したり。

という処女作『突貫紀行』（明治二十年）の書き出しは、そのころの心境をつづつたものである。ちなみに「露伴」という号（本名・成行Ⅱしげゆき）はこのころ作つた「里遠しいぎ露とねん草枕」という句に由来している。

（筑摩版「現代日本文学全集」⑦）

『浮雲』

二葉亭四迷

近所の女を克明に観察



……文三の出京した頃は、お勢はまだ十二の蕾、巾の狭い帯を締めて、姉様を荷厄介にして
てみたなれど、こましやくれた心から、「彼あの人はお前の御亭主さんに貰あつたのだヨ」と坐

興に言ツた言葉の露を突と汲だか、初の内にはにかむでばかり居たが、小供の馴むは早いもので、間もなく菓子一をニツに割ツて喰べる程、睦み合ツたも今は一昔。文三が某校へ入舎してからは、相逢ふ事すら稀なれば、況て一に居た事は半日もなし。唯今年の冬期休暇にお勢が帰宅した時而已、十日ばかりも朝夕顔を見合はしてゐたなれど、小供の時とは違ひ、年頃が年頃だけに、文三もよろづに遠慮勝でよそく敷衍して、更に打解けて物など言ツた事なし。其癖お勢が帰塾した当坐両三日は、百年の相識に別れた如く、何となく心淋敷かつたが……

これは二葉亭四迷の処女作『浮雲』（明治二十年）のひとつまである。

『浮雲』は第一編が明治二十六年六月に金港堂から出版されたが、ただし表紙は坪内逍遙の名で、中に序文で二葉亭のことを推薦している。二葉亭がまだ無名だったからだ。当時はこういうことがよくあった。

ところで、そのころ、二葉亭の家の近くにA・Nという、若い書生の間に評判の『新しい女』がいた。それが『浮雲』のお勢のモデルだという。彼女は女学生ではあるが学校には行かず、弟と二人で住んでいて、故里からの仕送りで気儘に暮らしていた。少しばかり洋書も読めて、多少新しい趣味も解し、洋服など着たりする女だった。顔はむしろ不美人であったが、若い男の間で

人気があった。硯友社の連中の中にもこの女と親しかった者がいた。

なにしろこの女は弟と二人で気儘な暮らしをしていて、遠慮気がねがいらなかったから、若い男たちがいい遊び場と思って毎日のようにやって来て、がやがや夜中まで騒いでいた。二葉亭は志士気どりで、そういう仲間に入ることはなかったが、つい眼と鼻の先に女が住んでいて近所の評判になっていたので、ふと小説を書く気になった時（もともと小説家になる気はまったくなかったという）偶然思いついたのがこの女のことだった。

そこでこの女をモデルに当時の「新しい女」を描こうと思ひ、しばしばこの女の家のみわたりを徘徊して様子を見聞し、女の態度から立ち居振る舞い、口ぶりまでをそっくりそのままつかつたという。もちろん、全部をモデルにしたのではなく、お勢のほうは美人にしてあるし、おてんばでもおひきずりでもないけれど。……このあと二葉亭は長い間小説の筆を断っている。

（新潮・岩波・角川・旺文社の各文庫）

『武蔵野』

山田美妙

大胆に言文一致を推進



「山里は冬ぞさみしきまさりける、人目も草もかれぬと思へば」。秋の山里としてその通り、宵ながら凄いほどに淋しい。衣服を剝がれたので瘦脰に瘡を立て、居る柿の梢には冷笑顔の月が掛かり、青白く冴互ツた地面には小枝の影が破隙を作る。はるかに狼が凄味の遠吠を打込むと谷間の山彦がすかさずそれを送返し、望むかぎりは狭霧が朦朧と立込めてほんの特許に木下闇から照射の影を惜しさうに泄らし、そして山気は山嵐の合方となつて意地わるく人の肌を噛んで居る。さみしき妻さは是ばかりでも無くて、曲りくねツたさも悪徒らしい古木の洞穴には梟がああ怖らしい両眼で月を睨みながら宿鳥を引裂いて生血をぼたく……

山田美妙の出世作『武蔵野』のひとつまでである。明治二十年十一月二十日と十二月六日の二回

にわたって「読売新聞」に発表されたもので、在来の小説とはまったく違った文体の新奇さと、悲劇的構想に当時の人々を驚かした作品である。

武蔵野を背景に、南朝時代、足利、新田が関東の山野に戦ったころの事件を描いた歴史小説（この人の秀作は歴史小説に多い）であるが、史的事実よりも歴史を背景にした空想的浪漫的作品で美しい散文詩のようである。そして当時の読書子を第一に魅了したのは、地の文を言文一致とし、会話を時代語にした文章の新味であった。

美妙は、二葉亭とともに「言文一致体」の創始者といわれている。どちらが先かはっきりしないが、とにかく小説の文体を革新した人である。そしてまた、ここに掲げた文章でもわかるように、それまでにはあまりなかった非情物つまり草木や動物の擬人法（「瘦腕に瘤を立て、居る柿」など）を用いていることで、今ならばあたりまえだが、当時は画期的なことだった。

本間久雄著『明治文学史』に、美妙の「言文一致」の特色を次のように挙げてある。

- 一、欧文体の句読法を応用してコンマ、ピリオドの区別をつけた。
- 二、欧文の感嘆符「！」疑問符「？」などを巧みにとり入れた。
- 三、修辞上倒置法、反復法、省略法、咏嘆法を用いた。
- 四、当時の流行語を挿入した。